

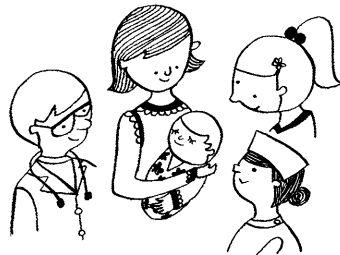
# 子どもとその家族の 幸せを願い続けて

## 乳幼児精神保健の風

今年の八月一日から五日にかけて、神奈川県横浜市にあるパシフィコ横浜において、アジアでは初めての世界乳幼児精神保健学会（以下WAIMH）世界大会が開催されます。世界大会としては十一回目で、そのテーマは「赤ちゃんに乾杯！」です。

今回の日本組織委員会会長の渡辺久子氏（慶應義塾大学小児科学教室）は、昨年夏に開かれた明治安田こころの健康財団の外国講師招聘講座&児童思春期講座への挨拶文の中で、このテーマの趣旨は、「障がいや

## ダーリンプル・規子



世界乳幼児精神保健学会 (WAIMH)  
<http://www.waimh-japan.org/>

病気をもって生まれた赤ちゃんも健康な赤ちゃんも、等しくかけがえない命として祝福しよう。そのような社会を目指し、乳幼児にかかわるすべての人が力を合わせよう」であると述べています。

その根底に流れているものは、一九九五年にアジアにおいては初めての第二十一回世界幼児教育・保育機構（OMEP）世界大会が同じ会場で開催された際に、津守眞氏が世界平和と保育への理想を語られたものと共通なもの、つまり、赤ちゃんや子どもとその家族の

幸せを願ってみんなで支え合っていこうということの  
ように思います。

私自身は一九九五年時の興奮や感動を思い起こしな  
がら、この八月を非常に楽しみにしています。

では、この乳幼児精神保健とは何なのか、それはど  
のように始まり、広がっていつているのでしょうか。  
「乳幼児精神保健」という考え方の流れ自体は、他国  
から始まったので、まずは世界の動きに目を向けてみ  
たいと思います。

## 乳幼児精神医学の誕生

精神医学というと、何だかちよつとわかりづらい、  
難しそうなものと思いましたが、簡潔にいう  
と、心に関する医学ということです。海外では、  
この心に関する医学は、早くから発達していつていま  
す。渡辺久子氏によると、第二次世界大戦以降に、戦  
争を直接体験した精神科医たちが、具体的に解決して

いかなくはいけない心の問題を抱えている人たちが  
目の前にし、取り組んでいく中で、実践的でリアルな  
精神医学が発達していきました。

その現実に取り添った動きの中で、それぞれの地域  
で悩みや問題を抱えている人たちを支えるための地域  
精神医学の実践が始まりました。地域の保健婦たちが  
家庭訪問を通して、各家庭の母親や赤ちゃんの現状に  
向き合っていくこともその一つでした。たとえば、ア  
ルコール依存症のお母さんと出会い、そこで誰からも  
世話を受けていない赤ちゃんに気づき、関心をもって  
いく、ということでした。それらは家庭精神医学の実践  
につながっていくものでした。

また、同時に子どもに焦点をおいた精神分析学も発  
達し、アンナ・フロイト（イギリスの精神分析家）は  
実際に戦災孤児を相手にしながら、外的な状況が子ど  
もの発達に与える影響を、ジョン・ボウルビー（イギリ  
スの医師・精神分析家）は社会に不適応な少年や非行少

年たちとかかわっていきながら、アタッチメント理論を、メラニー・クライン(オーストリア出身の精神分析家)は、子どもの精神分析を行っていく中で子どもの内世界的の中で起こっていることを掘り下げていきました。そこから、乳幼児期の心は今の自分ともつながっていて、心の奥底に沈んでいたのが、何かのきっかけで、また表出するという共通認識が生まれてきました。そして一九七二年には、セルマ・フライバーグ(アメリカのソーシャルワーカー・精神分析家)が「赤ちゃんのための精神医学」という概念を導入しました。

### 乳幼児精神医学から乳幼児精神保健へ

一九八〇年に児童精神医学のメンバーや、アカデミックな人たちが中心になって、世界乳幼児精神医学会(以下WAIPAD)が組織されました。この会は、現場の人たちにも心強いものでもありましたが、アカデミック色が強いこともあり、一方で、看護婦や保健

婦など、現場の臨床家で作っている国際乳幼児精神保健学会(以下IAIMH)もありました。

WAIPADのメンバーが、現場の人とのつながりを通じて、赤ちゃんとお母さんの生活感覚に近いものを考えていく必要があると、IAIMHに歩み寄り、そして、WAIPADとIAIMHが合流して、現在のWAIMHが出来上がりました。

ここでは、乳幼児精神保健とは赤ちゃんの心の健康を守る学問と実践であるという考えを基本にしています。そして、赤ちゃんの心の健康を守るためには家族一人ひとりの幸せが守られる必要があること、そのために赤ちゃんとお母さんの間の関係そのものに焦点を当てることが重要であるとしています。さらにそのことについて研究をし、心の健康を守るための予防やさまざまな問題を抱えている親子への支援について、多職種が専門家が職域を越えて力を出し合っています。

最先端の研究と、目の前の個々の人とかかわる臨床

とが車の両輪のように働き合って、赤ちゃんと家族の「生きる喜び」を模索し、未来の世代の子どもたちの幸せにつなげていこうとしている会で、世界の各地の現場に直接足を運んで、他機関と協力して活動しています。元会長のゴーチェ氏は、この会についてシンプルに「今生きている幼い仲間のことを考える輪にした」と、言っていたようです。

## “FOUR WINDS”の誕生とその流れ

さて、そのような海外での動きの中、日本にはどのように乳幼児精神保健の風が吹いてきたのでしょうか。どこの国でもそうでしょうが、日本でも昔から、現場で赤ちゃんや子どもとその家族に対して一所懸命支援をし、その育ちを応援している人たちは多くいます。保育士や幼稚園教諭はもちろん、保健師、小児科医、臨床心理士、助産師、また、専門の職種にはついていなくても、地域のつながりの中で応援してくれて

いる人たちもいます。しかし中には、自分たちとは違う考えの持ち主が周りに多く、孤軍奮闘しては疲れていた方々がいたということも、実際にはありました。

そのような中、一九九六年七月フィンランドで開催されたWAIMH世界大会へ参加した人たちから、日本でも各地で乳幼児精神保健に取り組んでいる人たちとの連携を目指そうと、乳幼児精神保健研究研修会(以下FOUR WINDS)が結成されました。フィンランドのラップランド地方の人たちがかぶる帽子に四つのトンガリがあるので、そのトンガリは、東西南北の四つの風(FOUR WINDS)を表しています。ラップランド地方の人たちは、吹いてくる風を肌で感じながら方角を定めて先へと進んでいくそうですが、そのように私たちも進んでいければ、という思いからFOUR WINDSが会の名称としてつけられたそうです。

そして、一九九七年、高知で第一回目のFOUR

WINDS全国大会が開催され、ジョン・リチャード氏がイギリスより来日し、生態行動学と愛着について講演しました。その後、長崎、岩手、山梨、東村山、鳥取、富山、佐世保、宮崎、そして二〇〇六年には浜松と、毎年日本各地に外国講師を招聘し、愛着、乳幼児精神保健診療、間主観性、「共感の根っこ」教育、親子乳幼児治療、赤ちゃんのコミュニケーションの音楽性などの話をしていただきました。

同時に、日本国内の現場の方々の話を聞く機会を設けながら、乳幼児精神保健の風を各地に起こし、そこで頑張っている人たちと出会っていきました。また、アジアという視点も大事にしていて、彼らとの交流もありました。

二〇〇六年秋、FOUR WINDSは乳幼児精神保健研究研修会から、乳幼児精神保健学会と名を変え、FOUR WINDSとしては十一回目の、学会となつてからは初めての大会を昨春秋、栃木で行いま

した。FOUR WINDSの大会の特徴は、分野にとらわれず、子どもにかかわる人たちが参加しているということでしょう。先程述べた職種のほかにも、弁護士、主婦、皮膚科医、児童精神科医、乳幼児の研究者らが参加し、どの方たちも、子どもとその家族の幸せを願っています。

ある人たちは、子どもたちをいっぱい甘えさせることで、その育ちを支えています。周りからはそのようなやり方に一部批判もあるようです。しかし、会に参加することによって、自分たちの考え方ややり方は間違っていないかった、あるいは、さらにこんなふうに支援する方法もあった、と自分たちがかわっている家族を包んで支えるのと同じように、この会の人々に彼らが包まれ支えられ、エネルギーをもらって、各現場に戻っていきます。

また第十回大会では、フィンランドから来日したトゥーラ・タミネン氏の話から、各領域の方々が、そ

れぞれに自分たちの現場ではどのようなことができるのか、具体的に考えていこうとエネルギーをもらいました。その話に少し触れたいと思います。

## ヨーロッパでの

### 早期促進プロジェクトというサービス

人口約五二〇万人のフィンランドは、決して子どもが多いわけではなく、二〇〇七年時は、一世帯に子どもが平均1.4人となっています。そして、夫婦共働きの人たちがほとんどです。ただし、家族政策では、①子どもにも子どもを産み育てる親にも、安全で安心な環境を提供し、物質的・心理的支援を保障する ②子育てに参加するための機会をそれぞれの親に等しく伝える ③できるだけ早い段階で予防的介入をする。以上の考えの下、育児休暇の制度が整っていて、出産をした母親は育児に専念することができ、父親も同じように育児に携わることができるようになっていきます。そ

れぞれの乳幼児と家族をいねいに支援していると感じられます。

特に三つ目に挙げられた「早い段階で予防的介入をする」方法として、ヨーロッパ五か国でされた研究及び実践が、ヨーロッパでの「早期促進プロジェクト（EPPP）サービス」です。それは、小さい子どもをもつすべての家族へのサービスであり、早期親子交流をサポートするものであり、親の自尊心や問題解決能力を高めるのをねらいとしています。

具体的には、妊娠中から母親にかかわり、母親の話を親身になって聞きます。それは出産後も同じで、そこからどのようなサポートが必要か、そのニーズがどのくらいあるかを見ていきます。そして、必要に応じて、親としての能力に焦点を当てた予防的介入（親のカウンセリングや、手助けの手順、親とのパートナーシップの取り方）や、早期親子交流に関する予防的介入（親子のやりとり、特に視線や話し方、扱い方、相

互性をどのように評価していくのか、上手なやりとりの援助、モデリング、その他の具体的援助)を、専門家と連携を組みながら行っていきます。

### 早期促進プロジェクトにおけるトレーニング

このプログラムでの大事な点は、保健師・看護師に対するトレーニングです。妊娠中あるいは出産後の母親、父親、そして乳児にどのような姿勢でかわかっていくか、母親の態度や行動の背景をどのように感じとり、どのように対応していくのか、そのことを一つひとつついでにねいに、トレーニング期間の中で行っていきます。

この話の後、興味のある質問がありました。それは、このトレーニングは保育士のためのものはないのかというものでした。これは、看護師や保健師のみでなく、日常的に乳幼児に接していく人たちすべてが、このトレーニングを受ける機会が与えられたらさらに幅広く、

子育て家庭を支援できるのではないかと考えるからだと思います。なぜならば、そのトレーニングの基本には、人間を人間として尊重し、「母親・父親が基本的に育児をする」ことを援助する、という考え方があからずからです。

支援者が親を尊敬し、親に寄り添い、親と共に悩んで一緒に歩んでいく。そのことによって、乳幼児も守っていけるという考え方は、それを具体的にプログラムとして行っているわけです。

もちろん、フィンランドやヨーロッパと日本では、文化や歴史などの違いはありますが、この根本の部分には人間として共通しているもので、そのことを感じているからこそ、日本の子どもにかかわっている専門分野の人たちが、この話を自分たちの方へ引き寄せ、自分たちの分野での可能性を模索する機会となっているように思います。

## 最後に

第十回のバリで行われたW A I M H世界大会の中で、ダニエル・スターン氏は、現在、心理学の世界では、一人心理学から二人心理学へと重点をおいていること、そして、その中で特に、「今・ここ」の瞬間が大事であること、相手との心の中でのやりとりが、言語・倫理などの心の発達の基礎であり、それゆえに「雰囲気atmosphere」に焦点を当てていくことが非常に大切であることを述べました。

また、世界中において、問題を抱えている人たちと接している人たち（それは、専門家であったり、日常にかかわっている地域の人でもあるわけですが）に共通している態度として、①話をよく聞く ②時間をかける ③支える態度 ④オープンな心をもつ ⑤病気も大変だけれど苦悩はもっと大変なことであるという考え方もつ、という調査の結果が出ているという

ことを述べました。そこには、世の中のできるだけ多くの人たちが、この五つの態度をもてるようになれば、子どもも大人も人として生きやすい社会になるだろうという思いがあるように感じます。

私たち大人も、言葉でのコミュニケーションの世界のみでなく、非言語的コミュニケーションの世界で生きています。乳幼児に関しては、なおさらです。人間が人間としてこの世の中で幸せであるために、また子どもが子どもらしくいられるために、これらの実践と実践が広まり、そして深まっていくようにと願っています。また、自分もできるところから始めようと、目の前にいる二歳のわが子を見つめながら思っているところです。

(中部学院大学短期大学部 幼児教育学科 専任講師)

### 参考文献

清水将之、渡辺久子ほか著『赤ちゃんのこころー乳幼児精神医学の誕生』星和書店(二〇〇一)